

訳者後記

本書は、原著『新版「あの世」からの帰還 *Recollections of Death*』（邦訳、日本教文社）の出版から一六年後に書かれた、マイクル・セイボム（以下、著者）の二冊目の著書です。臨死研究者の間では、著者は、當時はもちろん現在でも、少なくとも一部の臨死体験が超常的な現象であることを科学的に裏つけた画期的業績と見られています。そうであれば、この十数年の間、臨死体験の研究は基本的には進歩していなかったことになりそうですし、その著者が二冊目の著書を出したということは、本書が大きな意味を持っていることにもなるでしょう。

本書が持つ大きな意味のひとつは、臨死体験研究史上最有力とされる、パム・レイノルズという女性の事例（第3章）が紹介されていることです。もうひとつは、わが国でも有名な、臨死研究のふたりのパイオニアの「変節」を具体的な形で明らかにしたことです。そのうちのひとりには、水晶球ならぬ鏡を介して故人と再会させ、遺族の悲しみを癒すというふれこみで、「死者の召喚」なる霊的な悲嘆カウンセリングを始めたレイモンド・ムーディ（ムーディ、一九九四年）であり、もうひとりには、国際臨死研究協会（IANDS）の会長をはじめとする幹部役員を歴任してきた、有力な臨死研究者のケネス（ケン）・リングです（第7章）。ここではまず、パム・レイノルズの事例が持つ意味を検討します。続いて、本書の原著が一九九八年に出版された後に、著者とリングとの間で起こった論争について考えます。そこでは、欧米では避けて通ることのできない科学と宗教という問題を検討した後に、この論争を、真の意味での科学者とは何か、真の意味での科学とは何か、という角度から眺めることにします。

第7章に書かれている通り、ムーディが「一九七七年一月の暖かい週末」に、臨死体験の有力な研究者たちを、ヴァージニア州シャーロッツヴィルの自宅に招いたのが、まさにすべての始まりでした。シャーロッツヴィルは、合衆建国の父とされる第三代大統領トマス・ジェファースンの創立になる名門ヴァージニア大学を中心とした、人口四万人ほどの地方都市です。教職員と学生だけで、そのうちの半数以上を占める典型的な大学町で、郊外の高台には、ジェファースンの旧邸モンティチェロが立っています。

そのヴァージニア大学には、生まれ変わりの事例研究で有名な八七歳のイアン・ステイヴァンソン教授が、二〇〇二年末にその責任者の地位を退いた後にも、今なお現役で活躍する人格研究室が、医学部精神科に併設されています。このステイヴァンソンの生まれ変わり研究に対しても、一九七七年に、世界中の専門家から強い関心が寄せられました。^{註1} 臨死体験の研究も、奇しくもその一九七七年に、この同じ大学町で産声をあげたわけです。

また一九七七年は、超心理学の立場から、臨終時体験の研究（『人は死ぬ時何を見るのか *At the Hour of Death*』、邦訳、日本教文社）が、ふたりの心理学者によって発表された年でもあります。したがって、この一九七七年という年は、死後生存（存続）研究にとつて記念すべき年ということになります。

臨死体験は、いったん「死亡」した後に蘇生した人間が、その間の出来事を物語る体験のことですが、臨終時体験というのは、死の寸前に意識がはっきりしている状態のまま起こる体験のことです。しかし、このふたつの体験は、その内容が区別しにくいほどよく似ています。この臨終時体験の研究は、アメリカとインドという異なる文化圏の体験を比較した、世界初の比較文化的研究です。この研究を見ると、この種の体験が、文化圏によって表面的にはそれほど違って見えるか、また根本的にはそれほど共通しているかがよくわかります。

とはいえ、単なる体験では、それがいかに微に入り細をうがったものであったとしても、また、その後効果がどれほど大きいものであったとしても、主観的経験以上のものにはならず、体から心や魂が実際に抜け出した証拠にはなりません。臨死体験が単なる「脳内現象」ではないことを証明するには、それを裏づける客観的な証拠が必要なのです。一九八二年に出版された著者の前著は、その裏づけとなる有力な証拠を、その時点で得られた医学的データとともに数多く提示した金字塔的研究として、専門家たちから非常に高い評価を受けたのでした。

パム・レイノルズの事例

また著者は、前著の中で、臨死体験が単なる脳内現象だとするいくつかの仮説を、科学的根拠をあげて精密に反証しています。ところが、そうした還元主義的な（あるいは、脳の活動ですべてが説明できるはずだという）考えを持つ科学者たちは、著者の言葉にほとんど耳を貸しませんでした。著者の精緻な反証にもかかわらず、臨死体験は死にかけた脳によって起こるという仮説を、あたかもそのすべての側面が、それによって説明できるかのように断定的に主張する「懐疑論者」が、後を絶たなかったのです。パム・レイノルズの事例は、そうした批判をきわめて効果的に封する最有力の事例と言えるでしょう。

体温を摂氏一六度以下にまで下げて心臓を停止させたらうえ、頭部の血液をすべて抜き出し、脳幹の動きも完全に停止させた状態——通常の状態では死亡した状態——で脳の手術をしている最中に、パム・レイ

註1 この年、一流医学雑誌である『神経・精神病学雑誌 *Journal of Nervous and Mental Disease*』に発表した「生まれ変わり」という考えかたの説明の有用性」という論文の別刷りを請求する手紙が、世界中の専門家から一〇〇〇通以上届いたそうです。ステイヴァンソンは、それまで相当数の医学論文を書いています。これほどの反響はさすがに初めてだったそうです（Stevenson, 1989）。同じ年に、ステイヴァンソンの生まれ変わり研究が、同じ雑誌（第一六五巻三号）で特集されました。

ノルズという女性ミュージシャンが、鮮やかな自己視型臨死体験をしていたのです。しかも、両耳内には、びつたりはまる形状のイヤホンが詰められていたうえに、そこからクリック音が発せられていたので、まだ聴覚が残っていた段階でも、外部からの音は聞こえなかったはずで、加えて執刀医は、ロバート・スペツツラーという、世界的に著名な脳神経外科医でした。この医師は、世界中の専門家からその技法を注目されており、日本の専門家の間でも有名なので、その意味でもこの事例は無視できないはずで、このような事例を脳内現象とするためには、パムの体験や記憶は脳が死んでいた間に起こったものでない、と考えるしかありません。著者が本書第10章で検討している(二六五―二七二ページ)ように、臨死体験中のパムの「視覚」は完璧だったわけではありませんから、そこに集中攻撃をしかける批判者もあるでしょう。しかし、パムの臨死体験が、脳が死んでいた以外の時間帯に起こっていたことを裏づける証拠が存在するわけでもありません。また、意識的にせよ無意識的にせよ、パムが事前に持っていた知識をもとにして作話を行なった可能性もまず考えられませんが、したがって、そこを攻撃するとなると、ためにする批判という色彩が濃厚になってくるため、懐疑論者たちは自らの首を絞めることになりかねないでしょう。

そうすると、懐疑論者を自称し続けたければ、この事例を、さらには本書の存在を知らなかったことにするしかなくなります。その意味でこの事例は、自称懐疑論者にとつて踏み絵のような働きをしています。真の懐疑論者が偽の懐疑論者か、それによつてはつきりしてしまうからです。そのためか、「超常現象の主張を科学的に検討する委員会(CSICOP)」会長のポール・カーツ(Kurtz, 2000)も、イギリスの有名な懐疑論者スーザン・ブラックモア(<http://www.susanblackmore.co.uk/research.htm>)も、これまでのところ本書を完全に無視しています。しかし、真の意味で科学的批判をしたいのであれば、最有力の証拠を無視してすませることはできません。真理の探究をしようとせず、与しやすそうな部分だけを選んで攻撃するという態度をとると、自分が偽の懐疑論者であることを自ら暴露する結果になってしまいます。

逆に、臨死体験や超常現象の研究者がこの事例を重視しているかという点、ふしぎなことに、必ずしもそうではなさそうです。まず第一に本書は、少なくとも現時点においては、IANDSの推薦図書に入っていないのです。IANDSの中心的研究者であったケネス・リングに対する批判をしているからといって、他によほどの問題がない限り、最有力の事例が掲載されている本書を外すのが得策とは思われません。

しかし、本書を冷遇しているのは、IANDSばかりではありません。超常現象関係の文献に世界で最も通じているひとりであり、超常現象の研究書はまんべんなく拾い上げるはずのリア・ホワイトさんも、自ら運営する「人間の例外的体験ネットワーク Exceptional Human Experience Network」の書評ページで、なぜか本書を取りあげていないのです。これは、表面的には宗教的な問題なのかもしれませんが、実際には、超常現象の「とらえにくさ」(笠原、一九九三年)の範疇に入る現象かもしれない。超常現象の「とらえにくさ」とは、ごく手短かに言えば、その裏づけとなる証拠が有力なものであればあるほど、無意識的な抵抗が強くなる結果、それがいつのまにか忌避されてしまつたという現象のことです(笠原、一九九五年、第5章)。

もちろん、本書を正当に評価する専門家がいないわけではありません。そのひとりには、『臨死研究雑誌 *Journal of Near-Death Studies*』の編集長を務める、ヴァージニア大学人格研究室室長のブルース・グレイソン教授(Greyson, 1998)であり、もうひとりには、オランダの心臓病専門医ジム・ファン・ロンメル医師で

註2 パムは、手術の二、三日後、母親にこの時の臨死体験について話しています。パムの母親は、セイボムにスペツツラーの手術報告のコピーを渡しましたが、その時に、パムには一度も見せていないという点を強調していたそうです。パムも母親も、「血管が細い」(本書四九ページ)(本書四九ページ)という医師の報告書を見ていないのはましかないということなので、パムがマレー医師の発言として語った内容は、その書類を見た結果ではなさそうです。また、スペツツラーが助手が、パムにその話をした可能性があるかどうかを、オハイオ州立大学の心理学者が質問したところ、スペツツラーは、「可能性としてはあるが、実際には考えにく」と答えたそうです(Sabon, 2003)。

す。ロンメル医師のその論文は、イギリスの一流医学雑誌『ランセット *Lancet*』に掲載されています (van Lommel, 2001)。

アメリカの大手インターネット書店のアマゾン・コムのサイトを見ると、一般読者による本書原著の書評は、現時点で一二件寄せられています。それらのほとんどは、本書を全面的に評価するか、保守派キリスト教徒が書いたプロパガンダと見なして却下するかの、どちらかに分かれるようです。つまり、本書を科学的な立場から評価する人たちと、宗教的な立場からしか見ようとしないう人たちにほぼ二分されているわけです。この興味深い現象は、リングと著者の間に起こった論争にも関係してきます。

パイオニアの意味

ところで、科学的な研究とは、主として観察と実験を使って行なう真理の探究です。この原則は、頭で理解していても、現実実践するのは意外に難しいものです。それは、科学者といえども、しよせんは人の子なので、虚栄心をはじめとするさまざまな誘惑に負けてしまったためです。真理の科学的探究は、勝ち負けや権威からは本来的に縁遠いところにあります。にもかかわらず、そうした誘惑の結果、科学的研究の原則が、自分の思い込みや願望に従って、意識的、無意識的に大なり小なりゆがめられてしまうのです。

そのゆがみは、データの取捨選択に際して発生する場合もありますし、それ以前に研究法や調査法に関係して発生する場合もあります。その最たるものは、昨今マスコミをにぎわせることの多い、科学者自身によるデータの改ざんや捏造です。その研究が国家的な規模で行なわれている場合には、その結果として、国家の威信が揺らぐほどの問題に発展することもあります。いずれにせよ、それが発覚してもしなくても、それは単なる先陣争いにまつわる科学者の自滅行為でしかありません。つまり、そうした行為は、宗教者による神の冒瀆にも等しいもので、科学とは完全にかき離れたものになり下ってしまつてしまうことです。

もちろん、同種の問題はあらゆる分野で発生します。科学と並んでパイオニアが高く評価される探検という分野も、その例外ではありません。科学者がうそをつくはずがない、というのが思い込みであるのと同じく、探検家がうそをつくはずがないというのも思い込みにすぎないのです。現在、ヒマラヤの最難関とされる、世界第四位の高峰ローツェ(標高八五一メートル)の南壁を、短時間で単独登攀したという、スロベニアの登山家トモ・チェセンにかけられた疑惑がその一例です。その頃には既に、地球上には未踏の地がほとんどなくなっていましたから、チェセンが本当にその登攀に成功したかどうかは、特に最先端の登山家たちの間では非常に大きな問題になったわけです。

標高差が三三〇メートルもあるローツェ南壁は、雪崩や落石が多発しているため取りつくことすら困難で、それまで、「超人」ラインホルト・メスナーをはじめとする最優秀の登山隊や登山家をことごとく撃退してきました。そこでだけで、それまでに四人が命を落としているほどです。メスナーは、世界に一四座ある八千メートル級の高峰すべてに、世界で初めて登頂した南チロル(イタリア)の登山家です。メスナーの特徴は、今では珍しくなくなりましたが、ハーケンや埋め込みボルトや酸素ボンベなどの人為的登攀具を極力使わない、単独ないし小人数による「フェアな登山」を信条としていくことです。

ところが、それほど困難だった南壁の初登に、一九九〇年、前年に世界の登山界に彗星のように登場したチェセンが、単独で、しかも取りつきから頂上まで四五時間という驚異的なスピードで成功するのです。それを知ったメスナーは、自伝の中で、チェセンを登攀の天才と呼び、「その深慮と自信のゆえに達成し得た業績は、他のいかなるクライマーにもまねがけない」と絶賛します。そして、「トモ・チェセンは今日における世界最高のクライマーである」という言葉でその自伝を結んでいます(メスナー、一九九二年、四三六ページ)。

チェセンは、その直後から、一部の登山家に登攀の成功を疑われていましたが、その頃は、単なるやつ

かみによるものとして片づけられていました。ところが、まもなく、南壁登攀中に撮影したとされる写真が盗用だったことが、偶然のきっかけから発覚します。別の登山家による写真を勝手に流用し、自分が撮影したものとしていたのです。一方メスナーも、それとは別の視点から、チェセンの登攀に疑念を抱くようになります。チェセンに向けられた疑念を払拭しようとしたメスナーは、チェセンの講演会に出席します。そこで通訳と共同司会を務めたメスナーは、自らに向けられた疑問にまともに答えることができません。矛盾した発言をするチェセンを見て、かえって疑念を深めてしまうのです。そのため、次のような深い意味を持つ言葉でチェセンに問いかけます。

チェセンがこの危機を切り抜けなくてもべつに世界が崩壊するわけでもないだろう。だが、その奥にはもつと重大な問題が潜んでいる。われわれ究極のアルピニズムを追求する人間すべてに対して、チェセンは答える必要がある。私と同様トモ・チェセンを尊敬する多くの若いアルピニストに対して責任がある。「中略」もし、彼がこれからも、他人の発言に対する否認のみで自分の登攀を立証しようとするなら、わたしは自分の登山史の本から彼の名前を抹消するだろう。彼が、ただ彼だけが、一九九〇年のローツェ南壁にいたのである。彼だけが、この登攀が真実か否かを知っているのだ。(池田、一九九八年、一八六ページ。傍点引用者)

チェセンは、深い憂慮と悲しみを伴うメスナーの問いかけに応じようとせず、仲間たちから離れ、自ら孤立の道を選び、ロッククライミングに転進してしまいます。チェセンを信奉する若者たちは、メスナーの批判の真意が理解できず、あるうことかメスナーに非難の目すら向けるようになりました。「燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや」と言われる通りです。

メスナーは、他人との勝ち負けや人からの賞賛を問題にしているのではなく、自分に勝つて目的を達成することこそが探検の本質だという立場からものを考えています。したがって、初登という行為が持つ意味も、両者では全く違ってきます。一方、チェセンもその信奉者も、人との勝ち負けに意識的、無意識的にとらわれた枠内ではかものを考えていないため、根本の部分でメスナーと議論がかみ合いません。メスナーが「フェアな登山」と言った時、それは、単に埋め込みポルトなどを使わずに無酸素で登る、という技術的な問題だけを指しているのではないのです。

チェセンやその信奉者には、「彼がこれからも、他人の発言に対する否認のみで自分の登攀を立証しようとするなら、わたしは自分の登山史の本から彼の名前を抹消するだろう」というメスナーの言葉の真意も、その時のメスナーの気持ちも、決してわからないでしょう。この論争は、「真の意味での探検とは何か」という問題のみならず、「真の意味での科学とは何か」という究極的な問題とも深く関係しています。

とはいえ、探検と科学は別の分野なので、両者の間に大きな違いもあることは言うまでもありません。そのうちのひとつは、方法やデータをゆがめたとしても、それがどこまで意識的な作為によるものかという点で大きく異なることです。探検では、ほとんどの場合、本人が意識で承知して偽りを主張する——つまり、人に対してうそをつく——わけですが、科学の場合には、そうとは限りません。そこまで明確な自覚のないまま——つまり、自分にうそをついて——データをゆがめてしまう場合もあるということです。

科学と宗教という問題

話を戻すと、著者が臨死体験の研究から遠ざかっていた十数年の間に、臨死体験者と研究者は、NDEによって人間は組織化された宗教から離れ、より抽象的な靈性に向かうとする点で、意見の一致をみえました。この考えかたは、歴史の趨勢からすれば必然のように見えるため、非常に理解しやすく受け入れ

やすいでしょう。しかし、それが歴史的、政治的にいかにもっともらしく見えたとしても、科学者の立場に立つ場合には、そうした誘惑から離れ、何が事実かという点のみを追求する必要があります。

その見解を、マスコミ報道から知った著者は首を傾げます。かつて著者が得ていた所見は、「その正反対のもの」だったからです。つまり、NDEをした結果、体験者たちはその「信仰が深まり、伝統的な宗教的实践にそれまで以上に熱心になったらしい」（本書二二―二三ページ）のです。本書のもとになった「アトランタ研究」にはいくつかの目的がありますが、第1章で述べられているように、その食い違いの真偽を確認することもそのひとつでした。

そして著者は、アメリカ南部に住む体験者の中から、臨死体験の知識に汚染されておらず、臨死状態に陥ったことが医学的に確認できる人たちを独自に探し出し、非常に綿密な調査を実施します。その結果、「伝統的キリスト教徒でも、自由主義的キリスト教徒でも、（キリスト教徒ではない）神の信者でも、教会への出席率は同じように高く」なったことが、あらためて確認されました（本書一九六ページ）。リングをはじめとするIANDSの多くの研究者たちが得ている結果とは、今回も逆になってしまったのです。両者の間に、このように決定的とも言える差が生じたのは、なぜなのか。ケネス・リングらの研究は、個々の宗教の枠組みにとらわれない、いわば進歩的な人たちを対象にしたものようですが、それに対して、著者の研究は、保守派キリスト教徒の多い「聖書地帯」と呼ばれるアメリカの一地方で行なわれています。両者の間に差が観察されたのは、そのためなのでしょう。

研究というものは本来、「独自に追試」されなければなりません。ところが、著者の目には、リングの研究では「その原則が破られているように」（本書一九二ページ）見えました。そのため、第7章をほとんどリングの研究法の検討および批判にあて、宗教や政治から離れた客観的な立場で、リングの研究を冷静に分析することにしたのです。その前に著者は、リングとの出会いを振り返り、その頃のふたりの志をあらた

めて思い起こします。それは、当初の志を忘れてしまったとしか思えないふるまいをするリングに対して、著者が抱いた深い悲しみを現わしているのでしょう。

著者は、ケン・リングが一九八〇年にその志を高らかに謳いあげた文章を引用して、その批判を始めます。「宗教的意味と宗教的教義の間には、危険なほど細い境界線しか存在しない。その境界線を越えるとすぐに、必要ならざる派閥形成と後押し的研究という、ふたつの危険が待ち受けている。……もしNDE研究が、古くさい宗教戦争のために新しい剣をもたらすだけで終わるとすれば、私は、この研究にかかわったことを深く後悔するであろう」（本書一八六ページ）。ところが、わずか四年後に、その「危険なほど細い境界線」を自ら踏み越え、「ヒンドゥー教や仏教のような東洋的宗教や霊的普遍主義への顕著な変移」を明示する「新しい世界宗教」を提唱してしまっただけではないか、そして、臨死研究をその「後押し」として利用しているではないか、というのが著者のリング批判の骨子です（著者自身は、後押し的研究を七通りの方法を使って回避したことを明記）ています（Sabom, 2000, pp. 254-255）。そして、その著書の中でリングが、「科学的探究の基準」を満たす研究をしようという、それまでの努力を放棄してしまったことを、著者は、実例をあげながら具体的に指摘し、「ケンの中の科学者は、既に消え去って」いた、と慨嘆したのです（本書一八八ページ）。ここに、リングに対する著者の真の意味での友情（に由来する憂慮）が見てとれるように思います。

リングとセイボム論争

『臨死研究雑誌』編集長のグレイソン教授は、旧知のふたりが心置きなく議論を戦わせることができる場として、同誌の二〇〇〇年夏号（第一八巻四号）をまるまる提供するという異例の措置を講じました。それは、臨死研究者たちが、「このような競い合いによって、臨死体験の研究に取り組むための背景を、これまで以上に詳細に理解するための好機になる」（Greyson, 2000, p. 214）ことを願ったからでした。そのおかげで、リ

ングと著者は、「臨死研究の表面下で、長年にわたって醸されてきたとはいえ、これまで一度も明るみに出ることのなかった強固な見解や感情を表明する」(Geyson, 2000, p. 213)という、科学専門誌の誌面ではこれまでほとんど見られたことのない、壮絶な戦いを繰り広げることになったのです。まさに「天下分け目の戦い」です。

本書で著者がリングの研究法を強く批判したことに對して、リング(Ring, 2000)は、著者の期待を完全に裏切る、きわめて感情的な反応をしました。内容的にも非常に混乱しています。主として本書第7章の各所に対して、荒唐無稽、偏向的、理不尽、全くの事実無根、ひどい誇張、単なるたわごとなど、科学専門誌にあるまじき言葉をぶつけたうえ、著者に対しては、「見えずいたこじつけ」、「明らかに人を貶めようとしている」、「妄想病」などという言葉まで浴びせかけたのです。このように、確固不動の科学者の立場から容赦のない批判をしている著者の真意や友情がわからず、自分の研究にけちをつけられたと誤解したリングは、著者の「発言に對する否認のみで」自らの正当性を立証しようとしたのでした。

一方、著者は、本書の執筆に際して、その記述の「正確さと公平さ」には特段の注意を払い、慎重の上にも慎重を期して、ゲラの段階で本書を、I AND Sやリングの研究をよく承知している、ふたりの著名な臨死研究者に見てもらっています。著者とは信仰を異にしているこのふたりは、リングを批判した第7章の要旨に同感してくれました。そのため、さすがの著者も、こうしたリングの激しい感情的反論には驚かされたわけです(Sabom, 2000, p. 246)。

著者は、科学者であるとともに、保守派キリスト教徒でもありません。しかし、科学の持つ意味を十分理解している著者は、自らの信仰と科学的な研究を切り離そうと最善の努力をしています。前著で「宗教を素通り」していたことを考えれば、また、科学者の立場から終始離れることなく冷静に書き進めている本書第10章までを素直に読めば、そのことがよくわかるはずで、「聖書と臨死体験」と題された最後の第11章は、科学者の役割を完全に果たしたと確信したからこそ、保守派キリスト教徒の立場から(私見を交えずに)余力で書きあげることができたということなのでしょう。ですから、臨死体験の科学的研究としては、第10章までで完結しており、第11章は、キリスト教徒や読みたい人にだけ向けられたものになっています。このように著者は、自分の持つ信念や信仰が科学的研究を意識的、無意識的にゆがめてしまう可能性を十二分に承知していた(Sabom, 2000, p. 250)ため、先述のようにふたりの専門家に出版前の本書を検討してもらったわけですが、出版後には、ふたりの非キリスト教徒の臨死研究者から好意的な感想が寄せられたそうです。そのうちのひとり、カリフォルニア大学の著名な心理学者チャールズ・タート教授でした。

貴著に好感を持ったのは、ご自身のキリスト教的立場が正直に表明されているためです。正直に表明されているため、私には、偏向ではなくひとつの立場と考えることができます。明らかに先生の立場からなされた発言については、同意できる箇所もできませんが、先生に「偏向があるとは思っておりません。つまり、立場を明かさないうちに、そのデータがどうしようもなく偏ってしまったということがないので、人がそのデータを誤解することはないということ」です。(Sabom, 2000, p. 246)

著者は、そこまで準備を整えたいうえで、科学者としての節度を保ちながら、慎重に本書を発表したのです。ところが、リングには、そうした著者の姿勢や好意が、少なくとも意識の上では全く理解できませんでした。自分の科学的方法論を真正面から批判されたことによって、科学者の自覚を取り戻し、面目を立てる好機が与えられたことになるのですが、リングは、先述のようにきわめて被害的な受けとりかたをしていますが、著者が保守派キリスト教徒の立場から臨死体験をゆがめて解釈していると、(おそらく無自

覚のうちに) すりかえてしまったのでした。これは、著者の意図とは正反対の受けとりかたです。

著者は、リングの論難を、一五項目にまとめ、ひとつずついねいに論駁します。それを読むとあらためてわかりますが、リングに対する著者の批判は、実に周到に準備されたものでした。どれも興味深いのですが、ここではすべてを紹介する余裕はないので、肝心の点だけを二、三とりあげることになります。

ひとつは、「臨死体験をすることによって人は、『より伝統的な(キリスト教徒的な) 宗教的方向』から離れて行く」(本書一八八ページ)とリングが結論づけたと著者は述べているわけですが、それに対して、自分はそのようなことは言っていない、とリングが反論した(Ring, 2000, p. 22)。ことに関係するものです。自分が言ったのは、宗教的信仰調査表の当該項目に「はい」と答えれば、より伝統的な(キリスト教徒的な)宗教的方向にあることを意味する、ということ以上のもではない、とリングが反駁したのです。しかし、臨死体験者は個々の宗教から離れて普遍的宗教に向かう、それが「オメガ」(ティヤール・ド・シャルダンが唱えた地球上での人間進化の頂点。本書一八五ページ)へ至る道だ、というのがリングの主張ですから、この反論は非常に奇妙です。著者の言葉遣いをとがめた以上のものにはならないからです。

それに対して著者は、次のように簡潔に反論します。宗教的信仰調査表は、「より伝統的な(キリスト教徒的な) 宗教的方向」に向かうか、逆に「より普遍的な霊的方向」に向かうかの両極で構成されているので、普遍的な霊的方向に向かうと主張したということは、「より伝統的な(キリスト教徒的な) 宗教的方向」から離れて行くと主張したに等しいではないか(Sabom, 2000, p. 250)。ただし著者が本書で問題にしているのは、臨死体験による直接的な後効果です。だからこそ、次のような結論が引き出せるわけです。「私が得た結果は、臨死体験が東洋的な宗教思想に対する関心を高める可能性はないということの意味するわけではない。NDE自体とは無関係の要因によって、オメガに向かう」道筋が、深いキリスト教信仰へと向かう道筋のいずれかが選ばれるということなのだろう。臨死体験者の全員に、霊的熱情の高揚が見られるが、この熱

情が表出する方向は、「臨死体験自体ではなく」他の要因によって決定されるのだ(本書一九六―一九七ページ)。このことも関連しますが、著者は次のような指摘もしています。リングは自著『オメガに向かつて』の冒頭(第一章)で、「そのこと〔無作為抽出の前提が崩れているため、統計的分析が使われなかったこと〕は、小さな問題どころか大きな欠陥である」と述べる(本書一八八ページ)一方で、「事実上すべての回答者がIANDSの会員であることを考えれば、この結果は特に意外というわけでもない」(本書一九二ページ)という留保も明記している。そうすると、リングは、「調査の対象としたのがIANDSの会員であったために、霊的普遍主義の方向へ明らかに偏ってしまうのを認識していたように思われる。」ならば、それによって結論が大きくゆがんでしまう可能性がきわめて高いので、その留保条件を巻末の註(しかも表の脚註 [Ring, 1984, p. 314])として記すのではなく、「重要な偏りとして認め、冒頭で厳密な検討を行なうべきだろう」(Sabom, 2000, pp. 249-250)。

そして、その結果として、実際に結論が(リングが意図した方向へと)大きくゆがんでしまったのです。その結論がむりを重ねたものだったことは、次のリングの発言を見るとはつきりするでしょう。「驚くかも知れないが」と前置きしたリングは、まさに仰天すべき告白をします。実は、今は「オメガ」への道を歩んでいないのだ、と。そして、臨死体験者の友人に宛てて「しばらく前に」書いた手紙を引用するのです。

『オメガに向かつて』を出版した後、私の見かたは、いくつかの点でかなり根本から変わりました。

特に、NDEが「オメガ」かどこかへ至る道だという、私の以前の仮説を誓って取り下げたことです。臨死体験者が、私たちを燦然たる高次の意識へ先導する役割を果たす人たちだと、今はもう考えていませんし、この何年か前からそう思っています。NDEが体験者を変身させる可能性は否定しませんが、そういう変化が意識の野火のように広がって、人類全体に影響を及ぼすとは、もう考えていな

のどや。 (Ring, 2000, p. 226)

リングは驚くべき発言を続けます。『オメガに向かって』を出版したのは四〇代半ばだったが、「NDEがオメガへ至るといふ私の進化論的推測は、今や「若気の至り」のようなものに思える。今はその頃よりも年をとったので、人間の未来についてバラ色の楽観主義に燃えることはもはやない」(Ring, 2000, p. 227)。

この無責任きわまりないリングの発言に対して、著者は、「驚くとともに喜んだ」と述べながら、あくまで冷静に反論していきます。まず、次の二点を指摘します。ひとつは、一九九七年に出版された、ジュネーブ大学の女性研究者との対談で、リングが、「NDEが全体として示しているのは、全人類を高次の意識へと向ける進化の推進力です」と語っていることであり、もうひとつは、一九九八年に出版された自著『光からの教え *Lessons from the Light*』の序文で、「拙著、特に『オメガに向かって』と『オメガ・プロジェクト』(邦訳、春秋社)で提唱したように、臨死体験者——および、他の道筋を通じて同様の覚醒に至った人々——は、高次の意識へ向かう人類の進化の先導者かもしれない」と述べていることです (Sabom, 2000, pp. 261-262)。

そして、リングに対して、次のように痛烈な一撃を加えます。「君は、『光からの教え』を一九九八年(二月)に出版した何カ月か後に、『この何年前』から、『臨死体験者は、私たちを燦然たる高次の意識へ先導する役割を果たす人たちだ』とはもう考えていないと、友人や他の研究者たちに伝えたと書いている。君は、『この何年前』から、どっちの立場に立っていたのだ。個人的な考えとして手紙に書いているほうの立場なのか、それとも、インタビューや本の中で公にしたほうの立場なのか」(Sabom, 2000, pp. 261-262)。

最後に著者は、リングの反論への返答の中で、リングに向かって、次のように悲痛な呼びかけをします。

ケン、ここまで君の論文から一五項目の問題点を検討してきて、双方の意見が食い違うために君と

の友情が大きく損なわれてしまったことが、私にもはっきりわかる。その点については心から残念に思うとともに、君と和解できることを願っている。NDEが関係する大きな問題については意見が合わないが、君のことは友人として、さらには優れた研究者として高く評価してきた。また相まみえる日が来るのを心待ちにしている。(Sabom, 2000, p. 269)

そして、リングやムーディの本を読んで救われたという、末期がんの女性から寄せられた手紙を引用し、このような人たちがNDEの本を最後の頼みの綱にしているのであれば、その人たちのためにも、われわれ自身のためにも、われわれ臨死研究者は本当のことを語る義務がある、と結んでいます (Sabom, 2000, p. 269)。

わが国でも、リングの考えかたは、リング自身の著書の邦訳や、著名な評論家の著書(立花、一九九四年)などを通じてよく知られています。しかし、臨死体験によって人間は、テイヤール・ド・シャルダンが唱えたオメガ点に向かう、という考えかたがまちがっていたとリング自身が言うのなら、それを撤回した理由とともに、それを公の場で明言しなければなりません。それが科学者としての責務というものでしょう。

リングは、今年で満七〇歳を迎えました。九四年にコネチカット大学を退職し、九八年に臨死体験研究から退きましたが、この論争に関する読者からの投書が四通掲載された二〇〇〇年冬号(第一九卷二号)までは、『臨死研究雑誌』の編集顧問として名前を連ねていました。その後二二年に、作曲家サン・サーンスに関する心理学的考察 (King, 2002) を学術出版社から出していますが、その著者紹介には、「コネチカット大学心理学名誉教授。数点の著書がある」としか記されていません。このように、臨死体験の研究からはしばらく遠ざかっていましたが、〇五年秋には、久しぶりに同誌に登場しています。IANDSは会員数が漸減してきているので、神秘体験も扱ったほうがよい、という主張に対して、反対意見を投書として述べたものでした。ところが、その中で『オメガに向かって』を、何ごともなかったかのように引用してい

るのです。どうやらリングは、「深く後悔」することのないまま、いたずらに時を過ごしてしまったようです。リングの問題は、信念や思い込みがどれほど科学的データをゆがめしてしまうものかを教えてくれる、きわめて貴重な教訓になっています。しかし、そこまではよいとしても、その後、天下分け目のこの論争は、奇妙なことに、両陣営から完全に無視されて現在に至っています。専門雑誌にも、インターネットにも、その影を全くとどめていないのです。この事実は、どのように考えればよいのでしょうか。

二〇〇五年二月二十九日

笠原敏雄

参考文献

- 池田常道（一九九八年）『疑惑の系譜——トモ・チェセンをめぐる論争』T・チェセン著『孤独の山』（山と溪谷社）所収
- 笠原敏雄編著（一九九三年）『超常現象のどうえにくさ』春秋社
- 笠原敏雄（一九九五年）『隠された心の力——唯物論という幻想』春秋社
- 立花隆（一九九四年）『臨死体験 上下』文藝春秋
- R・A・ムーディ（一九九四年）『リユニオンズ——死者との再会』宮内もと子訳、同朋舎出版
- R・メスナー（一九九二年）『ラインホルト・メスナー自伝』松浦雅之訳、ティビーエス・ブリタニカ
- Greyson, B. (1998). Near-death experiences (from Survival of Bodily Death Conference summary. An Esalen Invitational Conference. December 6-11, 1998. Esalen Center for Theory & Research.
- Greyson, B. (2000). Editor's foreword. *Journal of Near-Death Studies*, 18, 213-14.
- Kurtz, P. (2000). The new paranatural paradigm. *Skeptical Inquirer*, 24 (6), 27-31.
- Ring, K. (1984). *Heading Toward Omega: In Search of Meaning of the Near-Death Experience*. New York: Quil William Morrow.
- Ring, K. (2000). Religious wars in the NDE movement: Some personal reflections on Michael Sabom's *Light & Death*. *Journal of Near-Death Studies*, 18, 215-44

- Ring, K. (2002). *Psychological Perspectives on Camille Saint-Saens*. Lewiston, NY: Edwin Mellen Press.
- Ring, K. (2005). Letter to the Editor: Scope of IANIDS and the journal. *Journal of Near-Death Studies*, 24, 51-52.
- Sabom, M. (2000). Response to Kenneth Ring's "Religious wars in the NDE movement: Some personal reflections on Michael Sabom's *Light & Death*." *Journal of Near-Death Studies*, 18, 245-71.
- Sabom, M. (2003). The shadow of death. Part One and Two. *Christian Research Journal*, 26 (2 & 3).
- Stevenson, I. (1989). Some of my journeys in medicine: The Flora Levy Lecture in the Humanities. <http://www.healthsystem.virginia.edu/internet/personalitystudies/some-of-my-journeys-in-medicine.pdf>.
- van Lommel, P. (2001). Near-death experience in survivors of cardiac arrest: A prospective study in the Netherlands. *Lancet*, 358, 2039-45.

【追記】本書の随所に登場する外科手術の記述については、訳文を鎌倉市常盤の田中医院院長田中迪夫先生にチェックしていただきました。ここに深甚なる謝意を表します。また、本書に引用されている聖句については、原則として共同訳聖書を参照しました。ただし、原著でも三種類の聖書を使っているようなので、本文の意図に合わない箇所については、特に明記はしませんでした。新改訳聖書第2版を参照しました。

訳者後記

【訳者略歴】笠原敏雄（かさはら としお）——一九四七年生まれ。早稲田大学心理学科を卒業後、北海道や東京の病院で心因性疾患の心理療法を続け、九六年、東京都品川区に〈心の研究室〉開設。現在に至る。著書に、『幸福否定の構造』（春秋社）、『希求の詩人・中原中也』（麗澤大学出版会）その他が、訳書に、『人は死ぬ時何を見るのか』『新版「あの世」からの帰還』『前世を記憶する子どもたち』『前世を記憶する子どもたち2——ヨーロッパの事例から』『生まれ変わりの研究』（以上、日本教文社）、『臨死体験』、『生まれ変わりの刻印』、『前世の言葉を話す人々』（以上、春秋社）その他がある。

連絡先 141-0003 品川区西五反田二一〇—八—一四 心の研究室
 電子メール kasahara@02.246.ne.jp ホームページ <http://www.02.246.ne.jp/~kasahara/>